

被災地 心のケア ④

見聞録

2011

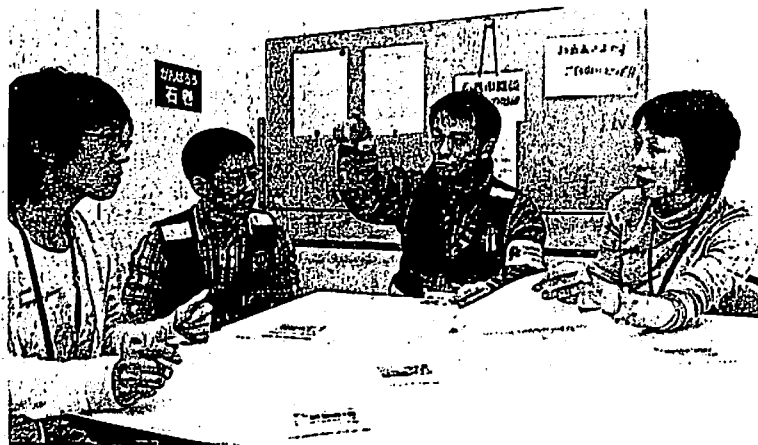
精神科医の佐竹直子さん(43)が国立国際医療研究センター(千葉県)の心のケアチームを率いて宮城県石巻市に入ってきた。避難所を回って被災者対応をして

いるなか、同市健康推進課の保健師、沓沢はつ子さん(52)に突然訴えられた。「職員はもう限界です」話を聞くと、ある避難所では、届いた食料に住民が殺到し、市職員の制止も聞いてくれないという。

「一列に並んで下さい」「早くしろ」

「押さないで下さい」住民の怒りに、職員が立ちすくむ場面もあったという。逆に、住民のささいな苦情に居丈高となる職員も

「二重被災」の自治体職員



医師らの心のケアチームに入った石巻市の道家由美子さん(左端)と沓沢はつ子さん(右端) (5月13日、宮城県石巻市役所で) =清水敏明撮影

いて、沓沢さんは危機感を募らせていた。当時、市の避難者は5万人を超え、約3000ある避難所でこんな光景が日常化

していた。被災者も、そして支援する市の職員も参っているのは誰の目にも明らかだった。

佐竹さんは翌26日、災害対策本部会議で市長ら幹部を前に訴えた。

「このままでは長く続きません。強制的にでも職員を休ませ

て下さい」

*

佐竹さんから話を聞き、私は5月中旬、石巻市を訪れた。市役所の中に被災者があふれ、職員は事務机の下にコートなどを敷いて寝泊まりしている、と聞いていた光景はなくなっていた。職員たちもたいぶ落ち着いているように見えた。

だが、職員の様子を毎日見ている人事課の道家由美子さん(51)は「連休明けに職員の週休日1日が確保できませんでした。でも今はいくら働いても次々に新たな業務が山積みになる。徒労感が募り、職場の会話さえ減っています」と話す。被災者支援に追われていた職員は、職場の閉塞感という新たな問題を抱え始めていた。

確かに、避難所は3分の

1にまで減ったが、2、770人という行方不明者の数は4月4日から変わっていない。世帯全員が津波に流されてしまい、正確な人数が分からないといったケースもあり、職員は連日避難所を回って確認する作業を続けている。役所でも、被災・罹災証明書や仮設住宅申請書など、生活再建の手がかりを求める住民は朝8時から詰めかけていた。病気で休む職員も目立ってきた。「誰もが自分が一番大変」と思っているから、他人を気遣う余裕もない」という声も聞いた。

自らも被災しながら、被災者支援や復興業務に懸命な自治体職員。心労を分かち合う職場の環境作りが必要だと痛感する。

(編集委員 南 砂)